

# 「感情労働」から保育をとらえ直す

— 同僚に対する感情ワークを中心に —

太田光洋

## ● 「感情労働」って何？

かつて、倉橋惣三は、「子どもの生活」に対して「細やかな心遣い」を向けること、「子どもの生活に對して常に気が利いていること」が、幼稚園の先生の役目であると言っています。保育者の目は何よりも子どもの生活に向けられ、それに対して敏感であることが求められるといえましょう。

保育の中で、保育者は、子どもが、安全で守られ

ているという被包感や自由感が感じられ、自分を見たりかかわってくれていると感じられるように、感情をコントロールし、表現しています。このように、職業として感情をコントロールし、相手に特定の感情状態を引き起こす人とかかわる仕事を、アメリカの社会学者、アーリー・ホックシールドは、「感情労働 (emotional labor)」と定義しています。保育は、保育者が感情を管理し、表現しながら、子どもや保護者を育てていく感情労働であるといえます。

す。ここでは、感情労働において行われる感情管理、感情操作という意味で、もう少し広い概念である「感情ワーク (emotional work)」という言葉を用いて使いたいと思います。

保育をこうした観点から見ると、おもしろいことが見えてきます。たとえば、感情労働という観点から保育者の仕事を見れば、その感情が向けられるべき(感情ワークの)対象が、「子ども」から「親」に移ってきていると見ることが出来ます。また、子どもでも親でもなく、「同僚」や「先輩」に向けられているようにも映るのです。

### ● 保育における人間関係と感情の問題

〜いま、なぜ「感情労働」か？

少し話が変わりますが、保育者の人間関係やそこで働く感情にかかわって、かねてから気になっている問題があります。

保育者の誰もが「子どもたちのためによい保育がしたい」と思い、日々の保育を振り返り、また機会を見つけては学んでいます。しかし、これだけ盛んに保育研究が行われ、研修会が行われているにもかかわらず、そこで学ばれたことが十分に保育に反映されていないのではないかと、という疑問がぬぐえません。筆者自身、幼稚園教諭として、あるいは幼稚園長として保育現場に身を置く中で、それぞれの保育者の学びが、その内容ではなく、むしろほかの保育者との関係、保育者集団のあり方によって、保育に活かされるか否かが決まってしまうのです。簡単に言えば、事の是非よりも保育者の人間関係、そこでの感情に大きく左右されるということです。

子どもには個性や創造性、多様性を求めるのに、必ずしも同僚に対してはそうではない。保育者は子どもとのかかわりの中で絶えず自己決定を求められる自律性の高い仕事であるはずなのに、その日常的

な行動は逆で、「みんないっしょ」「ほかの先生方に合わせる」というように同調的・画一的で、保育においても「隣のクラスに合わせる」ことが議論もななく行われることもよくあります。こうした矛盾は、保育現場が抱える深刻な問題といわざるを得ません。

また、保育者の退職理由の上位には常に「職場の人間関係」が挙げられます。事実、実習に行った学生や就職した卒業生から保育者の人間関係にかかわる疑問や悩み相談を受けることも少なくありませんし、保育士が、対「子ども」、対「親」以上に、「職場の人間関係」にストレスを感じていることを指摘する実証的な研究もあります。

こうした問題は、しばしば「女性の職場だから」とか「幼稚園はそういう所」というような言い方をされることによって、これまで踏み込んで検討されることはありませんでした。筆者自身、この問題を実証的に扱う視点や方法をもっていませんでした

し、経験や年齢もこうした研究を行うのに耐えられるものではなかったと思います。しかし、保育の状況が困難になることで、拠り所としての保育者の人間関係や組織の重要性を見直す必要が切実になり、近年の質的研究の方法論が模索される中で、実証的にアプローチする環境も整ってきました。

「感情労働」という視点は、私たちに新たな視点から保育を見直す切り口を提供するもので、これまでと異なる観点から保育の問題を見つけ、保育を容認させる可能性のある切り口ということができると思っています。

### ● 保育者の目はなぜ子どもから離れるのか

保育者が子どもに濃こまやかな目を向けることが難しくなってきたのはなぜでしょうか。なぜ、感情ワークは保護者や同僚に向けられるようになったのでしょうか。

子どもよりも保護者や同僚に保育者の心遣いが向けられるようになった理由は、少し考えればすぐに幾つか思い当たります。たとえば、共働き世帯が増加や長時間保育が当たり前になり、子どもが家庭で過ごす時間が少なくなったことよって、これまで家庭が担ってきた教育機能が幼稚園や保育所に求められるようになってきていることは、実感していることだと思います。「以前は、入園前にできて当たり前だったことが、今はできない」というように感じられることです。

あるいは、子育て困難を抱える保護者への支援や親のリフレッシェを支える一時的な保育など、保育に対する新たな役割が保護者や社会から要請されるようになってきています。核家族で育ったかつての子どもが親世代となり、平成九年を境に共働き世帯が専業主婦世帯を上回るようになり、その差は増え続けています。この一〇年ほどの間に日本の「親」

や「家族」像は大きく変化しているのです。それに伴って、保育の社会的な役割も変化しつつあると考えられます。前に述べた保育における感情の問題に加えて、社会の変化もまた保育者の目を子どもから遠ざけている要因といえます。

### ● インタビューから見えてきたこと

ここまで見てきたような厳しい状況の中で、保育者を支えるものは何でしょうか。もちろん、子どもの成長や遊びに夢中になる姿、保護者との共感など、いろいろ考えられます。ですが、おそらく保育者の日常を支えるのは、毎日の保育（生活）を共にする保育者仲間です。だとすれば、同僚に向けられる感情ワークが、どのような内容や質をもっているかを明らかにすることがまず必要だと思えます。ここでは、保育者の同僚に対する感情ワークに絞ってインタビュー資料を拾いながら見てみましょう。

「最近は、子どもとどうかかわったらいいかわかわらない親が多くて、いろいろなところに子どもと出かけたりまするんだけど、子どもは子ども、親は親っていう感じで、経験も感情も共有してないみたい。親子関係が安定してないと入園してから大変で。親もどうしていいかわからないから……すごく気を使わなければならぬ親が増えています」(幼稚園教諭、四十五歳)

社会の変化とシンクロして、親も変容し、そのことが親に対する感情ワークの内容を変えることを要請しています。相対的に、そこに多くの注意を向けざるを得なくなってきたということができると思います。

さらに、保育者が置かれている労働環境が不安定になっていくことも無関係ではありません。

「前の職場で、私、いつ自分が立たなくちゃならないだろうと思って、先輩の先生たちばかり気になって、落ち着いて自分の仕事に集中することができなくて……。だから、書きものは絶対家に持って帰ってしてたし。今でも職員室では落ち着かない感じ……」(幼稚園教諭、三十五歳)

この先生は、幼稚園での勤務経験があり、出産のために一時職を離れた後、非常勤教諭として「前の職場」である幼稚園に三年勤務したのですが、先輩の先生に常に気を使っていたと言います。

ほかにはこんな声も聞かれました。

「三歳児だからその活動はちょっと難しいし、四、五歳児と違って、もっと遊びの感じでゆったり進めたほうがよいと思うんだけど、(先輩の)〇〇先生がやるっていったら、それに合わせなく

ちやいけなくて。子どもがかわいそうなんですけど……」(幼稚園教諭、四十五歳)

この保育者の場合、目を向けるべき方向が違って  
いることは明らかですが、前述したように子どもで  
はなく、保育者に対する感情ワークが、子どもに対  
するそれに優先してしまっています。この問題と似  
た回答を、実習を終えた学生に対するインタビュー  
でも耳にし、実習からその萌芽が見られることがわ  
かります。

「担任の先生の目がすぐく気になって。なんかい  
つも自分が気が利かないなって思い知らされた感  
じで。迷惑かけちゃだめ、みたいな。その、園の  
流れの中で私がいることで遅れたりとかペースが  
乱れたりしちやいけないとすぐ思ってたから。  
それに対して自分が思うように行動できなかった

し、先生の期待に応えられてないって思ってたか  
ら」(大学三年生、A)

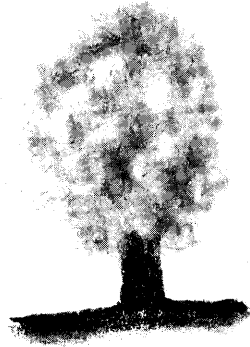
「すみません」や「ありがとうございます」も  
「ご指導いただきありがとうございます」ってそ  
んなに言わなくてもいいって思うくらい言っ  
た。子どもが「えっ」て目を見張るくらい」(大  
学三年生、B)

これらに共通するのは、その判断や行動が保育者  
自身ではなく、ほかの保育者や実習担当保育者に委  
ねられていることです。この実習生は、自分ではど  
う行動してよいかわからずに不安でいながら、表面  
的には保育者から「一生懸命動く学生」として見え  
るように行動しています。いわば、実習生は自分が  
注意を受けたりせずに済むように感情を操作してい  
るといえます。ホックシールドは、このような操作

を「感情管理」といい、心の中で思う内面と異なる行動を他者に見せる場合の行動を「表層演技 (surface acting)」と呼んでいます。保育者としての成長は、このような表層演技が、行動が内面の素直な表現である「深層演技 (deep acting)」になっていくということもできます。しかし、保育における活動や保育者の行動のあり方や意味について考えたり、理解したりすることがなければ、表層の行為をまねるだけに終始するしかありません。

保育について未熟な実習生や新任保育者は、同僚をモデルとして多くを学びます。しかし、保育者が自律的に判断し、行動していくためには、保育についての基本的な知識や教養が必要であり、それをもとにして保育者同士が話し合うなどして、その意味を問うことなしに保育者として育つことは難しいと思われまます。現実には長時間保育などによって保育の準備に十分な時間が取れなかったり、保育者同士

が時間を共有して子どもや保育について学び合うことも難しくなっています。



「私たちは実践研究がすごく勉強になったんです。……先輩の先生たちは、子どもにとってよいこととか、新しいこととか、研究発表なんかもあるんですけど、結局、新しいことなんかは面倒くさいからしないっていうのが最近見えてきて……。だから、(私は) 辞めちゃおうかなとか、でも辞めるのも悔しいなとか……。悩んでいます」

(幼稚園教諭、二十六歳)

この先生は、研究発表を通して保育を見直す機会をもったことで、こうした同僚の姿が見えるようになったのだといえます。同時に保育を深く考え、一緒に学んだ一歳違いの同僚への信頼を深めています。実践研究を通じて、保育や子どもについて振り返り、よく考えること、ほかの保育者と話し合うことは、保育者のあり方を問い直したり、保育そのもののあり方や視点を確かなものにしたりする力になっ

## ● 終わりに

「そうそう、こういうことある」とうなずきながら読んでいただけたなら、現実とあまりずれていないといえるでしょう。私もまずは、感情労働という視点から問題を見つけ出すことから始めたいと思います。ここで示された問題は保育現場の組織の問題としても、保育者個々人の問題としても考えることが

できます。過敏になる必要はありませんが、保育者の感情ワークに意識的になることが、その原因や問題の解決を探り、子どもたちに濃やかな目を向ける手がかりを得ることにつながるのではないかと思

（九州女子大学）

## 引用文献

- 1 倉橋惣三／著 津守真／編 森上史朗／編『倉橋惣三文庫1 幼稚園真諦』フレーベル館、二〇〇八年、五十七頁
- 2 A. R. ホックシールド／著 石川准・室伏亜希／訳『管理される心』世界思想社、二〇〇〇年
- 3 垣内国光・東社協保育士会／編著『保育者の現在』ミネルヴァ書房、二〇〇七年六十五頁
- 4 総務省「労働力調査特別調査」（昭和五十五年～平成十三年）および総務省「労働力調査（詳細結果）」（平成十四年～十七年）